

第 33 回総合教育会議

○山口知事

今日は「高大連携」というテーマなのですが、佐賀県は県立大学を 4 年後の開学に向けて準備を進めているわけですけれども、実は単に大学をつくるという言葉以上の意味があると思っていて、これまで長い間、佐賀県というのは、教育委員会が高校までを所管して、あとは送り届けるというか、今は 4 年制大学に行く人が大体卒業生の半分を超えるという状況になっていたとみると、そこでぶつん切れたような形になって、とても、大人になるまでの出口までフォローしているのかなという、思いをずっと持っていて、他県に勤務していたときは、大学との連携するポジションがあったりとか、長崎県では、長崎県の大学みんな集めて総務省と議論をするという会があり、小中高大というのが繋がっているというイメージがすごくあったんですが、佐賀県に来るとそこがぶつん区切りがあるような気がして、大学について議論することが県議会でもほとんどなくてというところ、非常に憂慮していた中で、今回、大学をつくるということになったことによって、佐大とも、西九州大とも、短大とも非常に連携が密になることはとても意義があることだなということと、あわせて小中高大とつながって、大が繋がると、今度、産業界とも繋がるわけなんですね。なので、ずっとこの佐賀県の将来を見据えた中で、県政全般と教育というものが、いよいよ今までなかったパートという、大切な大切なパートがつながったんだなと思うので、今まさに高大連携というものをみんなで議論するということ、すなわち佐賀県の将来を見据えていくという姿勢につながっていくので、ぜひ皆さんと様々な議論ができたらいいなと思います。時間がありましたら講師の処遇についても議論できたらいいなというふうに思っております。

以上です。よろしくお願いします。

○佐保政策企画監

ありがとうございました。

それでは、会議に入ります。

最初の件は「高大連携」についてでございます。

まず、政策部から説明をさせていただきます。

御承知のとおりです。ただいま県では佐賀県立大学の開学に向けて準備を進めているところでございます。目指すのはチャレンジを続ける大学ということで、キーワードが、「多様な主体が関わりオール佐賀でともに成長」する。「日本一プロジェクトが生まれる大学」、「“チェンジ・メーカー”を育成」ということがキーワードになっております。

ポリシーが 3 つございまして、1 つはディプロマ・ポリシーという学生に身につけてほしい能力、また、県立大学の学びのイメージとしてのカリキュラム・ポリシー、ここでは県全体をフィールドにした PBL というのもございます。さらに、入学者に求めることとしてのアドミッション・ポリシーというのがございます。こういった形で、どういう学生を育てた

いのか、求めたいのかといったことも含めて今お示しをしているところでございます。

さらに、学外との連携で、高大連携を推進していきたいと考えております。

このPBL、課題解決型学習については、課題を自分たちで発見し、その解決策を考えていくという実践的な学びを行ってまいります。まずは企業や地域の現場を知るフィールドワークを行いまして、議論を重ねて本質的な課題を発見していく。また、解決策を考え、試してみる。それで、現場の皆さんに解決策というのを提示していくことでございまして、佐賀県全体で佐賀県の課題に対して向き合っていくと。そういうことを考えて、県全体を学びのフィールドにしようということでございます。

大学にずっといるということではなくて、佐賀県全体に出ていって、プロジェクト・ベースド・ラーニングしながら、卒業してからも実践的な課題解決能力がつくような、そういう社会実装をした学生を生み出していきたいと考えております。

もう一点が、本日のテーマである高大連携でございます。

小中高大、先ほど知事からもお話ありましたけれども、分断されているというのが日本のこれまでの佐賀県の教育の特徴であると思いますけれども、これを繋げていこうということとして、県立大学には高校の先生や学生たちがもっと集うと。大学生が高校のチューターに行くと。それで、高校と連携してのプロジェクトの実践を行う。探求学習の成果発表の機会を提供するという高大連携というものをしっかりとやっていきたいと考えております。

また、「小中高との連携」と書いておりますけれども、知事がよく言われるんですけど、小学生は何で分数が必要なのかというようなお話をありますが、子どもの頃は何となく技術として教わっていたことというのが、その後の学びにどう繋がっていくのかという、どう生きていくのかという、何か将来が見通せるような、そういう連携を行うことができるようないいようなことで、佐賀県全体の学びというのをよりよいものにしていきたいということを考えております。

それでは、現在の県内の大学と高校の連携した取組についても甲斐教育長から御説明をお願いしたいというふうに思っております。

○甲斐教育長

現在、県立高校と大学とどんな連携をしているか、簡単に御紹介をしたいと思います。

1つは、これは致遠館高校の理数科です。佐賀大学やほかの大学、西九州大学もですし、その研究の内容によって、県外の大学とも協力しながらやっています。青鶴課題という、致遠館のカラーの青と佐賀大学さんの校章のカササギでそういうふうな名前をつけながらやっています。

理数科の生徒については、まず、1年のときには大学の講義や実験を体験して、どういったものなのかというのを知る。これは週に1コマぐらいの時間です。2年生になると、週に

1回3コマ続きで課題を深めることができます。8つの分野、自分が好きなテーマを決めて、そこに研究班に分かれて研究をしますので、大学の先生からの研究指導も受けますし、中間報告でも助言を受けます。3年生になると、いよいよ論文を英語でまとめて発表するということになります。そのつくり込みに当たっては留学生が、やっぱりどうしても難しい科学英語のところの指導だとかといってやり取りしながら、留学生とやり取りしながら助言を受けながらつくっていきます。発表のときにはプレゼンも英語ですし、質疑応答も英語ということで、すごく大きな視点で、国際的に活躍できる科学人材を育てようということでやっております。

文系は文系でまたもちろん課題もやっています。

次は、小城高校と九州大学なんですけれども、小城高校は「おぎすたいるリーダー」といって、「さがすたいる」、共生社会を推進しているところですが、九州大学のアクセシビリティ・ピアソポーターという学生たちがいます。この方たちは、学内のアクセシビリティ、様々な施設等の情報にアクセスしやすいようにということで活動している、ボランティアではなくて大学から委嘱された学生で、色々な学部の学生がこれを構成しているということです。そういった学生と一緒にになって障害について語り合ったりとか、外部からPICFAとか、そのアーティストとかに来ていただいて、クロストークしたりとかということで学んでいます。

先日、お披露目があったのですが、小城高校の生徒が毎日通る玄関に大きく壁画を、PICFAさんのあるアーティストの方がデザインして、みんなでつくり上げた。足場を組んで、天井は高いんですけども、壮大な壁画をつくりました。そこには多様性とか自分らしく輝くということを、地域の方にも見ていただくし、生徒たちも毎日見るといった活動を行っております。

小城の町なかを散策して、色々な気づきを小城市に提言したりもやっています。

多久高校の場合は、福岡大学の商学部に飛田先生、飛田ゼミというアントレプレナーシップで有名な先生がいらっしゃって、その先生もいろんなところにそういったプログラムを提供したいというのと、多久市と縁があって結びついたということでして、そういう大学生から経営戦略を学ぶとか、実際に店舗を出して、多久高マルシェなどを開催しながら課題研究の充実に努めています。

その他にも、高大接続科目プロジェクトという大学の単位に結びつくというのが、西九州大学・西九州大学短期大学部で用意をされています。3つのキャンパス、佐賀、神埼、小城キャンパス、それぞれ学科があるので、そこで3日間の受講と試験合格で単位が取得できます。大学、短期大学に入った場合には、それが単位として認められるというもので、単なる体験で終わらずに、大学の学びに関心を持って、進路指導の一助になるようにということで、今、展開されています。特に佐賀東高にはスポーツ科がありますけど、そこには大学の先生が来て出前授業もしてくださって、クロストレーニングの分析なども一緒にやってくださっています。

佐賀大学と県教育委員会と連携しながら、「とびらプロジェクト」という事業を行っています。高校3年間にわたり継続的にプログラムに参加してもらうということで、教師になりたい、科学に関心がある、医療に関心がある、アート、社会、それぞれの分野で1年から3年まで続けて、学年において2、3回ずつのプログラムなんですが、今1,300人ぐらい受講をしております。

この他にも様々な場面で連携しながらやっています。先ほどあった県立大学も、専門家チームの方々にも、課題研究の発表を見ていただいたり、あと、山口和範先生に学校に行っていただいて講義していただいて、課題解決型学習というものの質の向上に大変お力添えをいただいているところです。

以上です。

○佐保政策企画監

ありがとうございました。

それでは、県全体の学びの質の向上につなげるため、高校と県内の各大学について、どのような連携が考えられるか、意見交換をお願いしたいと思います。

また、高大連携を進めるためにも、教職員のスキルアップなどについても、幅広く意見交換ができればと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

○山口知事

日野さん、（県立大学構想の事業の中では）県内の高校とどんなことをやっているんですか。

○日野政策総括監

教育委員会の人たちからいろいろヒアリングしていたりとか、去年で一番大きかったのは、県側のスライドの3枚目、右下のこここのところがまさにそうだと思うんですけども、高校の探究学習の成果を去年第1回探究プレゼン大会というのをやって、その審査を専門家チームの3人にお願いしたんですよ。

そういう視点で見るとこうだよねというのがあって、そこで僕らも、探究で何でそういうことをやっているかというと、県大はPBLを中心にやりますので、県大のPBLは高校でいえば探究学習なんですよね。要するに、与えられた教科書で一生懸命勉強するんじゃなくて、自分で課題を発見して、今、こうやってステップ1、2、3、4とやっているんですけど、教科書的に書くとこうなんですが、本当はここに行ってまたここに戻るみたいなことの繰り返しなんですよ。

そして、フィールドに行くだけだったら今度は知識が身につかないから、だったら県大のあの科目を理論的に履修したらどうなるみたいな話を、ここがぐるぐる回るので、それを県

大はやるつもりなので、そのPBL学習と高校の探究学習というのは、非常に親和性が高いと思っていて、例えば、我々の中でも今議論しているのは、高校3年生の探究が本当に好きな生徒は、県大のPBL入門とか、全然取ってもらっていいわけです。さっき単位の話が出ましたけど、県大に入ったらもう単位を実は8単位取っていましたとか、そういうのをすると、本当に高校の学びというのが生きてくるんじゃないのかなと。

○山口知事

すごいね、高校生の段階で単位を取得するとは。

○溝上委員

もう既に持っているということですか。

○日野政策総括監

入学したら単位を付与する制度が今あるので、だから、高校と大学を本当に接続するためには、システムとして繋がっておかないと、多分、いろいろ今、教育長からご発表がありましたけど、高校と大学の特定の教員が繋がっているケースがほとんどです。システムじゃないんですよね。そうすると、その教員の熱量に全部左右されちゃって、県大はせっかくですから、システムとしてそれが機能すれば、県大のその教員の負担が減るんですよ。同時に高校の教員の負担も減るんです。探究の現場どうしようかとか、という形で、本当に学びって何だろうかということにいろんな人が集中できるみたいな、そんな仕掛けをやっていきたいなと。

○山口知事

何で今まで小学校6年、中学校3年、高校3年でぶつんぶつんぶつんとさ、思いっきり分断させられていたんだろうか。

○日野政策総括監

どこの国でも分断はしているんですよ。当然、学制はありますから。ただ、日本はやっぱりブリッジがないんですよね。どんなところも。一個一個細かく学習指導要領で、はい小学生、中学生、大学のカリキュラムに関しては。

○山口知事

うん、そうなのよ。もう何だろうね文科省にもこれは指導要領をもっといいのよ、お任せしてふわっとしとこうよと

○日野政策総括監

グラデーション

○甲斐教育長

高校生も小学生の目の前でモノをつくったりとかして、すげえとか言ってなっているんですけども、このシステムとか、本当の意味で繋がるというところを、これからもっとできればいいなど。

○飯盛（いさかり）委員

昔の部活動はそんな感じですよ。細切れで指導が切れていくからということで、指導者が合わないとか合うとかと、ところが欧米こう、学校じゃないところで1つの 指導というか、それが日本もそっちに向かってきて大分、国際大会とかでも成果が出るようになってきているみたいなところだと思います。

○加藤委員

何か、高校での学びが大学入学後も生かせるような、そこの教育の流れを強化するということはすごく大事なので。

○甲斐教育長

どこに繋がるかと見えるのが、すごくモチベーションに繋がる。

○加藤委員

うんうん、そうそう。そして、大学卒業後もね。企業とのつながりが増えれば、とても有意義なメリットが出ているんじゃないかなと思う。

○山口知事

特にこれをやっていると、別に佐賀県の大学に行かない人にとっても、とても意義があるかなと。

○日野政策総括監

そうです。

○山口知事

なので、いろんなことで。

○日野政策総括監

身につくので。

○山口知事

身について、県外に行くにしてもね。

○甲斐教育長

行くにしても、佐賀でここまで住んでいてもらっていると、何かすごく_____。

○日野政策総括監

あと、座学の意味がよく分かると思うんですよ。何のためにこの経済学入門を学んでいるんだとか。

○加藤委員

高校生がもっと高校のときに学びたかったというのが、金融というのが一番ということで、47%ぐらいだったかな。その金融の仕組みを知らないがために、社会に出ちゃってからあんまりよく分かんないみたいな感じもあったので、その辺が、もう少し教養として組み込まれたらいいのかなと思います。

○飯盛（いいもり）委員

日本って、何かファイナンス勉強するのがすごく遅いですよね。もう少し早い段階で、複利の構成とか教えておけばね。

○溝上委員

もっと早く勉強したかったとかね。

○飯盛（いいもり）委員

そうよね。

○日野政策総括監

県立大学の検討の中にも本当にその議論が1回すごくしたことがあって、やっぱり世の中は経営を名乗る学部でも、会社経営とか、そういうマクロ経済はよく学ぶんですけど、個人資産の形成ってあんまりないんですね。それを勝手にやってくれる。でも、個人資産の形成というのをちゃんと学んでいると、自分が会社を立ち上げるとき、起業のほうにすごく関心が移ったりもするので、そういった意味で、個人資産形成みたいな科目というのも県大の中ではしっかり教えないといけないという議論がございます。

○山口知事

最近、病院長さんと意見交換をすると、俺は別に医学の勉強しかしていなかったのに、何で突然経営をやらされることになって。でも、その人によって全然違うし、もっと早くね。

じゃ、何でだろうねこのカリキュラムって聞くと、昭和の頃は、経営のことは何もしなくても勝手に収入が入ってきていて、病院経営が苦しくなるなんて思っていないから。ただ、存在さえすればよかったのでというわけよね。だから、時代が変わったから、色々なカリキュラムがついていいんじゃないかな。

○日野政策総括監

そうなんです、だから、例えば、医学部なんていうのは、医者というより、言ってみれば技術者を育てるカリキュラムしかないので、その人が本当は開業医の息子だったら、経営学部の何かを。

○溝上委員

そうです。よく聞きます。

○日野政策総括監

だから、そうなんですよ。

○溝上委員

いや、本当にそうです。

○日野政策総括監

僕も医務課にいたときにそういう相談が本当に多かったですよ。

○溝上委員

この資料の2ページとかにも大学生が高校生に経営戦略を教えるみたいな、こういうのも引き上がっていいですよね。やっぱり教えてもらう側から教える側になると、途端にぴしっと勉強して、引き上がってしていくというのがすごくコラボの意味がありますよね。

○飯盛（いいもり）委員

異年齢の交流はすごくいいなと思いますし、前回もお話ししたと思うんですけど、うちの園児と今年度からの県立高校2校と交流を始めたんですけど、例えば、佐賀工業だったら、日頃やっている、学んでいることを園児たちに教えるという、なかなかそういう機会はないですよと校長先生もお話しされるし、牛津高校との連携は、もうあそこは生活経営科があって、将来保育士になりたいという子がいるので、実際に園児たちと関わる場が少ないという声を聞いていたので、今年度から始めて、すごくいい、お互いにウイン・ウインな関係になるので、そういうのがどんどん増えればいいかなと思います。

○飯盛（いさかり）委員

高校の探究というのは、始まってどれぐらいになりますか。

○原岡副教育長

探究という言葉で行われるようになったのは、今の学習指導要領になってからですけれども。

○飯盛（いさかり）委員

それを今確認したのは、小学校、中学校でそれに当たるのは、総合的な学習の時間というのが始まって、もう20年といわんと思うんですが、何か目に見える成果というか、そういったのは何かあるかないろいろ考えて、あんまりないような、個人的な意見ですが、ないような気がしていて、それこそ自分のことは自分で決められる子にせんといかんというようなことで、あんまり成果が見えないような。それは何でかなと思ったら、やっぱりそれぞれの学校で、言葉悪いですが、思いついたこととか、やりたいことをやっている、中学校もそんな感じ。中学はかなり地域との連携とか職業的なことができていますけれども、それを考えたら、高校が好き勝手にそれぞれやるんじゃなくて、どこかと今の話題となっている県立大学とか、そういったのが成果を生むことにはつながっていきやすいんじゃないかなという気がしますね。

○溝上委員

私は企業なんですけれども、毎年大学の先生たちからPBLをやろうという話があって、実は昨日も福岡の大学生とディスカッションをしたんですが、PBLはうまくいくケースといかないケースというのがありまして、テーマ設定なんですね。テーマ設定がいいとうまいくんですけど。

先ほど日野さんもおっしゃったんですけど、テーマって結構難しくて、課題だけじゃないんですよね。課題と、投入できるリソースと、実現可能性みたいな三角形の中で、それが何かでか過ぎると、課題はいいけど何もならなかったねみたいな、地球を平和にしますみたいな——あるじゃないですか。で?みたいなことになったりとか。小さ過ぎると、それは一体何だっけみたいなことになるので。

何かそんな観点で言うと、やっぱり実はさっき高校の負担みたいな話もありましたけど、教育委員会のほうでディスカッションすると、やっぱり何となく高校側の負担というのもこれから大きくなるんだろうなという中で言うと、高校で考えるだけじゃなくて、あるテーマに乗っかるとか、そういう感覚もあっていいような形で、アジェンダーオーナーなんか高校だけじゃなくていいという。何かそういうふうにすると、そのテーマならやってもいいねみたいな、そういう幅を広げると負担も減るし、テーマ設定が難しいんですよ。難しいです。

○甲斐教育長

いいテーマがあったら、この指止まれで、それに関心がある人たちが止まっていって学べるコミュニティーを——自分で見つけるのもいいんですけど、深堀るテーマを設定してそこに集まるという

○日野政策総括監

今、1つの会社とかに5人とかで入りますというのが本当にいいのかという議論をしていて、物によっては、実は1つの会社に30人お世話になったけど、そこが5人の6チームぐらいに分かれしていくと、チームごとに多分目線が変わってくるし。だから、PBLは結局答えが1個じゃないということを学ばなきゃいけない。1つになると、今度また学びが悪いと、これがファイナルアンサーだみたいに誤解しちゃいけないから。そこがだから、学ぶ手法を徹底的に学ばせるというのを僕らは今議論していて。だから、PBL、現場に行くという回数もそうなんだけれども、デザイン思考とか、システム思考とか、ファシリテーション能力とか、コミュニケーション能力とか、そこをきちんとやっぱり大学の中で教えない駄目だよねということを。

○山口知事

学びといふものに答えがないものもあるっていつ頃学んだんだろう。

○日野政策総括監

それは多分大学に入ってからじゃないと学ばなかつたのではないか。

○山口知事

だよね。だから、大学に入って、これは答えがないやんみたいな。

○荒木委員

医学部でも答えありきの6年間で、社会人になってから、こんなに世の中、患者さんの体にとっても答えがないし、こうやって社会に出ても答えがないんだって、本当に6年を過ぎてから気づいたみたいな、社会に入ってから気づくような人もいます。

○山口知事

これは何でやろうね。

○甲斐教育長

そうですね。やっぱり学びのスタイルが違ったんだと思います。

○山口知事

高校の先生が、いや、実はこれは答えがねえんだよなと言ったらびっくりした……

○荒木委員

でも、数学のような。もちろん、ベースは大事。

○飯盛（いさかり）委員

学校で基礎を学ぶというのがですね。

○日野政策総括監

大学入試はやっぱりペーパー偏重だったので、どうしても高校で探求学習とかに力を入れる子供が十分大学の入試のときに評価されないわけです。

○山口知事

ああ、評価システムがないか。

○日野政策総括監

はい。だから、県大の中ではアドミッションポリシーという入試の基本的な考え方を議論しているんですけど、本当にこれまでの大学のようなペーパー重視でいいのかという議論をしていて。

そうすると、実は大学側としては手間暇かかるんだけれども、面接だとかディスカッションだとかというのをすごく重視しないと、多分こういうPBLのときに活きてくれる子供をうまく見つけられないよねという……

○荒木委員

今、高大連携については佐賀大学に入ってからすごく関わらせていただいているんですけど、最初に言わされた単位を取るというのは高大接続のほうになっていて、何か高大連携を今までずっとやっていて思うのは、やっぱり連携だけじゃ駄目だよねといって、その連携をどう接続に生かしていくかといって、佐賀大学も単位取得をやっていて、うちはデータサイエンスをやっているんですけど、年間50人ぐらい来て、それは全ての県からなんんですけど

今までは大学でちょっと難しいことを勉強できたよとか、とびらシリーズを今やっているんですけど、佐賀大に来るんですね。来ていただいて、何か大学の雰囲気を味わう、偉い先生のお話を聴くという座学でやっていて、そこで満足して、私も佐賀大学を受けるように頑張ろうと思ってもらうことを目的としているんですけど、やっぱりそれだけじゃ足りないよねといって入試に生かすようにしないと、プロジェクトも少しまた変化をつけていかないといけないと話しているところです。

すみません、続けて申し訳ありません。

甲斐教育長が大学のテーマに沿って、この指止まれといって集めるというふうに言われていたんですけど、SSHは子供たちがテーマを決めるんですよね。テーマを決めるところに、2年生のところですかね、テーマが決まったところに行くんですけど、何かこれは大丈夫かなみたいなのがいっぱい出てくると。出てくるんだけど、それをやっぱりうまく何とかしてあげたいなと思って、そうやって本人がやりたいと言ったことを何とか形に、3年生の英語を持っていくとすると、やらされ感じやなくてやりがいがあってできた。そのときに、私は大学の先生として、これは無理よとか思うけど、そのときに高校の先生と、こっちのSSHの環境だったら、ここまでできますよみたいな、お互いでやり取りをして、高校生の出した研究を形にしていくというふうに言っているので、そういう意味でも、大学の先生とか企業の方が高校に入っていくということは必須かなと思います。

○甲斐教育長

そうです。さっきこの課題設定が難しいとあったように、本当に課題設定が難しい。大き過ぎても、小さ過ぎても。なので、そのところを、探究したいという子供たちの気持ちを大事にしながら多くの人と関わる、大学から専門的な知見とか。高校の先生は、実はここまでできるんです、大学の先生は知らないところもあると思うので、お互いにこれをやっていくというのがいいのかなと思ったんです。

○溝上委員

昨日、福岡の大学の学生さんが僕らに提案してきました。大学の女子トイレに生理用品を常備したいという、そのためにどういうふうにしたらできますかということだったのですが、何か課題設定、課題解決というと、壮大な何か地域のとか、高齢化のとかというよりも、何か欲しい日常というか、あつたらしいね、これみたいなのものをつくりたい、どうしたらできますかねみたいなことが発信点になると、多分テーマ設定は広がる。

○山口知事

それは、いつとき県議会でその議論が多々あって、今は置いているんじゃなかったっけ。

○溝上委員

ごめんなさい、福岡の大学生です。

○甲斐教育長

身近な課題で社会的な課題みたいな。

○山口知事

その設定はいい設定だった

○溝上委員

良い設定だなと思って。そうすると、例えば、じゃ、それは僕らが寄附して何か月かの分は出せるかもしれないけど、続かないよねと。じゃ、お金稼いでいかないといけないねみたいな。ほかにどんなことをやりたいのと言ったら、地域でイベントをやりたいですと、働く女性のための。じゃ、そこでイベントをやって、そこで僅かながら物を売って収益を立てて、そこから更にできることを追加していく方法もあるよねみたいな。昨日は1時間だったので、その程度ですけど。

例えば、何かそういうテーマがあったら、いろんな人たちが集まって、いろんな議論をしたら、こんな方法があるじゃん、あんな方法があるじゃん、この人が協力してくれるらしいよと広がりが多分出てくる。そのテーマをどう出すかみたいな話がちゃんと設計されると、日本一プロジェクトが起こる県立大学みたいなことのシステムに繋がっていくんじゃないかなと。

○山口知事

J Cの全国大会のときに、駅の北口を歩行者天国にしたいとか、そういうふうなやつも結局、実現できたもんな。

課題をどうする。警察に説明できるか。

○日野政策総括監

そういうことです。実は理屈じゃないんですよ。何か情熱を持って訴えられるか。

○溝上委員

面白そうだねみたいな感じだと思うんです。

○日野政策総括監

だから、結局、県大ではPBL、1年生、2年生、3年生、4年生と各年度に配置しようと思っていて、しかも、入門、初級、中級、上級、発展という5つぐらいのカテゴライズしようという議論をしているんです。そのときにやっぱり課題発見が一番大事なので、ただ、いきなり全部をやらせると、難しい部分も出てくるだろうと話もしていて、じゃ、1年の前期は、例えば、フィールドワークを行ったときのお作法までを徹底的にやろうとかですね。だって、まだ学生が社会に出ていないから。1年の後半が課題発見までできるスキルを身につけようかとかという、ちゃんとPBLの段階において、2年生の後半ぐらいからちゃんと決策を考えるってどういうことだろうというのをやっていったほうがいいんじゃないかな。

そうしないと、毎年同じことを1から4までやって、繰り返しやったら、多分成長しないんじゃないかなという話をしていて。

そうすると、課題は大き過ぎてもいけないというのがよく分かるし。だって、フィードワークで人に会ったときのお作法とかをちゃんとしておかないと誰も聞いてくれないよみたいだ。

○山口知事

そうなってくると。俺はずっとこの町の中で佐賀はおいしいお握りを買える店がないとか、空港とかでおにぎりを買える売店とか、ああいった陳情受けることがよくあったので、でも、何か最近は、じゃ、自分でやってみたらどうですか……

○日野政策総括監

例えば、そういうのが全部あったときに、今度、県大の大学の、例えば、PBL初級で課題の発見ができない人向けのゼミとか何かがあって、課題はここにありますと、このニーズがありますと。だから、発見するのが得意な人もいれば、解決策を見つけるのが得意な人もいるし、プレゼンするのが得意な人もいるから。

○山口知事

さっきの話で言うと、じゃ、俺がやろうという経営者が出してくれば、僕はうれしい。

○日野政策総括監

そうなんです。

○溝上委員

そうそう、全くそのとおりだと思います。

○山口知事

主体が出てくるもんね。

○溝上委員

そうです。

○日野政策総括監

だから、そうすると、PBLの一番発展形は、ぶっちゃけ言うと、ビジネスモデルになるぐらいまでのやつをやれたら本当に面白いねと。全員がそこに到達しないということも僕らは分かって、全員到達するとなると何かうそっぽいし、学生も疲れるから…

○飯盛（いさかり）委員

今、出たのちちょっと、これは言っていいなと思ったのが、小学校から先うまくいっていないんじゃないかなと思うが、失敗させないんですよね。例えば、何か物を作ってスーパーを借りて販売しますというときに、これだけのものがあるんだけれども、それを、おじいちゃん、おばあちゃんが買いに来るわけですよ。全部売り切れて、ああ、うまくいったねと。売れ残ったからどうしようかという課題はもう全然。だから、高校のそのPBLの成果発表のときとかに失敗、どうなんだろうと、今、全てうまくいったで終わっているんじゃないのかなと。そういったようなことも踏まえていくことも大事じゃないかなと。

○山口知事

小学校、中学校で、ちょっと失敗だったねということはあまりないんですか、先生が。

○飯盛（いさかり）委員

文科省が失敗をさせていいというようなことは言っているんだけど、なかなかそれをやれる先生というか、学校はない。

○山口知事

それはよっぽど懐の深い先生じゃないと、ああ、今度頑張ろうねという雰囲気にならないのか。

○甲斐教育長

だから、そこが安心して失敗できるようにしないといけない。

○飯盛（いいもり）委員

この前ある小学校の校長先生と話したときに、親が子供に失敗させないようにと、前に前に行って全部対策をするから、何か今の子供たちって失敗をしないような道を歩いていくんですよと…

○飯盛（いさかり）委員

みんな、おじいちゃん、おばあちゃんがもう買物袋いっぱい手を持って帰っていると、お金出して、その子供たちが作ったものを販売しているスーパーに行って、買って、全部、完売になるまでするという。

○飯盛（いさかり）委員

売れ残さない。

○甲斐教育長

多分、嬉しくて買いに行っているとは思うんですよ、無理じゃなくて。買って、御近所の人たち、子供が作ったんだって、そういうのはあると思います。

○飯盛（いさかり）委員

かわいいがために。

○山口知事

でも、世の中って、半分以上失敗なんだけどね。県庁の仕事もそうだけどさ、あっ、じや、ちょっと修正しよう…

○前田政策部長

失敗からしか生まれないと思いますよね。

○甲斐教育長

だから、高校のいろいろなビジネスコンテストとかの発表になると、その事業計画はどうなっていますかと、その収支はとかって、やっぱり質問されたり、やり取りして、そこがまだ、そこまでは考えてませんでしたとか、そういうやり取りは出ています。

○甲斐教育長

それはやっぱりビジネススキルを学んだり。

○飯盛（いいもり）委員

多久高マルシェなんですけど、企業と連携してマルシェやったりして、それを各校いろいろやっていると思うんですけど、それを発表するときに実践する場って、今あるんですか。例えば、今、ちょっとアイデアが思いついたのが、佐賀駅の南側を大きなマルシェにして、高校別のマルシェにするとか、物品販売するとか、そういうのがあると、いろんな学校がやっている取組って、県民の方に知ってもらえるし、この高校ってこういうことをやっているんだと、いろいろ社会のほうに出てというか、教育委員会だけでなく、一般の方たちにも広く周知されるんじゃないかなと思っていますけど。

○甲斐教育長

意外とそういうのはやっています。例えば、インターハイのプレイベントだとか、あとはパズルコンテストって高校生が動画を発表する。

ゆめタウンで発表するときに、お店を出して、そしたら一般のお客さんは何だろうと寄ってきてみたいな、そういうことはやっていますね。

○飯盛（いいもり）委員

毎年、パズルコンテストとか、木工の家具とかすごいいつも買うんです、園児たちがすごい喜ぶので。

○甲斐教育長

私、あれは結構高くていいのに思ってしまうんですけど、結構安い値段で

○飯盛（いいもり）委員

安い、本当に安い値段で買えるんですよ。うちの園の玄関に置いているんですけど、もう園児たち、ビー玉が入っているんです、支援学校が作ったやつ。あれずっと遊ぶ。

○甲斐教育長

間にね、木と木の間にビー玉が入っていてきれいなんです。

○飯盛（いいもり）委員

ああいうの、買ってよかったなと思いますよね。

○荒木委員

何かさっきのマルシェみたいなのを高校のみで取り組んでいるのもいいし、高校と大学の部屋みたいなのも面白そうですね。何か地域の方に、高大連携というのを明らかに見せるというか、小城高校、九大とこういう形でやっているんだとかいうのを玄関だけじゃなくて、もっと周囲の方に見ていただく。

○山口知事

そうか、だんだんでもそのマルシェもさっき安過ぎるという話があったけど、いわゆる通常価格というか……

○飯盛（いいもり）委員

値づけですね。

○山口知事

そうなっていくともっといいけどね。だから実践的な、ちゃんと利益も出るという……

○飯盛（いいもり）委員

佐賀商業が作っている佐賀牛のレトルトカレー、まあまあいいお値段するんですけど、でもね、おいしい。

○甲斐教育長

あれは企業さんとコラボでしたよね。

○原岡副教育長

コラボしています。基本、利益が出ないように価格設定をしているので。

○山口知事

利益が出たらその学校に帰属するとかさ、いいんじゃない、それやったら何か。

○甲斐教育長

その話はしていますよね。

○原岡副教育長

はい。

○山口知事

そしたらうれしいじゃん、自分の学校に収益が入ったら。

○甲斐教育長

それを元に次の開発……

○飯盛（いさかり）委員

次のモチベーションになるね。

○山口知事

そうそう。

○飯盛（いいもり）委員

それって、ふるさと納税とかになっていますか。

○山口知事

ふるさと納税も今、検討したらと言っているけど、高校別にね。

○飯盛（いいもり）委員

あともう1点、これも何度もこの会議で触れてはいるんですけど、私が直接、佐賀大学のキャリアセンターが中心になってやっているサガHR交流会というのがあるんですけ

ど、そこに関わっていて、産業人材課が関わっていると思うんですけど、長い目で見て、冒頭、知事が言わされたように、大学を卒業した後も県に関わるような施策も必要かなと思って。逆に、佐賀大学に入ってくる県立高校出身の子供たちに、佐賀大学に入ったらこういうのがあって、こういう企業とこういう取組をしているよというのを、高校の段階でPRすると、そういう手厚いサポートが受けれるんだったら行きたいなという制度をつくればいいかあと、実際に関わっておりますので。結構、佐賀大学と県内企業とが一緒になってインターンシッププロジェクトとかいろいろやっているんですけど、何かそういうのを県立高校の校長先生とかに周知して、佐賀大学に行くとこういう内容とか、佐賀大学に入学が決まっている学生たちにそういう情報を提供するのもいいと思うんですよね。

○山口学校教育課長

高大連携、20年前はやはり大学がちょっと敷居が高いと思っていた、15年ぐらい前ぐらいたから大学の先生方も、高校と連携しながら研究を教えてもらったりしています。今は、本当にしっかり連携ができている感じになっていますし、西九州大学も、各高校の課題を解決するために一緒にやりましょうというふうに、大分近くなってきたという感覚ですね。

○荒木委員

何か、本当に昔は大学で研究をしないといけない、大学生のお世話をしないといけないというような形があったんですけど、やっぱり私たちも高校のほうに行かないと、高校を卒業して来ていただけないので、何かやろうという先生が増えました……

○山口知事

ああ、そうなんだ。

○山口学校教育課長

大学の先生方は、社会貢献とか、高大連携というのも評価の一つになる。

○山口知事

高校の先生にとってもいいよね、大学とつながっているという、また新しい視点がね。ずっと同じことばかり教えていたってな。

○飯盛（いいもり）委員

それこそ、このサガHR交流会というのは2か月に1回ぐらい佐賀大学のほうで開催しているので、県庁からも近いので、教育委員会からまずちょっと1回入っていただいて、

そこで何かつなげれるものはたくさん、そこからつなげるのもいいかなと、毎回参加して思っているんですけど。

毎回、産業人材課の方は2名ほど参加をされているので、御一緒に来ていただいてもいいのかなと思っています。

○溝上委員

先ほど日野総括監がおっしゃったそのシステム、プロジェクトが生まれる、PBLが生まれるシステムという中で、やっぱりどうやってテーマを掘り起こしていくのかというのはすごい大事だとさっきからお伝えしているところですけど、何かどんなふうにして集めていくようなイメージなんですか。

○日野政策総括監

今までの大学のPBLって、やっぱり教授の個人的なつてでやっているので……

○溝上委員

はい、もう全くそんな感じ……

○日野政策総括監

県立大学では、産学連携センターをつくる際に、どこの大学も、要は学部を教えている教授との兼任で、結局、何かマッチしないみたいなのが多いので、産学連携センターを学部とちょっと切り離した形で、非常にその専門部隊な感じでつくってはどうかという議論を中でやってるんです。当然、そこに張りつく教授もいるし、そこに張りつく事務スタッフもいるわけなんですけど、それを専属部隊にしてしまって、そうすると大学のシステムとしてPBLの現場の開拓だとか、企業さんとの例ええばアポ入れの調整だとか、そこを一括してやってしまったほうがいいんじゃないかと。

そうすると、外から見ても、例えば大学と連携したいときに、たまたま多いいろんな企業さんの連携の仕方も、自分はこういうことあるんですけど、農学部に知り合いいないからやめとこうとかってなっちゃうので、でも、そのセンターに言ってくれれば、センターのほうで、じゃ、この人とこの人をちょっとつなげてみようかみたいなことも一括してできるんじゃないかと。そこまでやっている大学というのは日本はあんまりないので。

○溝上委員

企業の立場から見たときに、あそこに相談すれば何かアレンジしてくれるとかといういいだろうなと。例えば、サイバーセキュリティーのこういうイベントをやろうと思うんですけど、ちょっと学生と一緒に何かやるといいと思うんですけどどうですかねとか。

ちょっと奇抜かもしれませんけど、教育委員会でも、どうやったら教員になる若者が増えるかというテーマにしたり、学生目線で考えるのが一番いいんですよね。

○溝上委員

はい。どうやったら教員になる学生が増えると思う?のように。

○日野政策総括監

そうすると、例えば佐賀市立何とか中学校を学生が見ていて、別の提案をするということも全然ありだと思うんですよ。だから、現場というのは企業だけじゃないので、センターミちゃんたと承って、そうすると、県大の先生だけだったら駄目かもしれないから、じゃ、これは佐大のこの人とも組んだほうがよっぽどいいんじゃないかというアレンジもできるので。

○溝上委員

何かそういう事例がリアルになると、企業とかいろんな人たちがそこに投げ込んでくる。そしたら、苦労せずともプロジェクトが生まれやすくなるのかなと思いました。

○飯盛（いいもり）委員

委員会のレクでも話していたけど、結局やっぱりコーディネートする人がいないと、なかなかどっちも難しいのかなと思います。

教育現場の先生たちもやっぱりいろいろほかの業務もあって、忙しい中、じゃ、これやれよと言ったら、また一つ仕事が増えるわけですからね。

○山口知事

コーディネーターは必要、大切だなと。

○日野政策総括監

そうです、はい、大事なんです、そこが。だから、そのコーディネーターに何を求めるかによって違うので、そこは今、中でその議論をしているところなんですね。

○溝上委員

そこは伴走支援ですよね。やっぱり伴走を誰ができるかという、このテーマだったらあの人だねみたいな人が決まると……

○飯盛（いいもり）委員

すぐ相談に行きます。

○山口知事

課題解決が自主的に行われていたりすると、すごくうれしいね。きっかけとかヒントとか、そこに県庁がまた支援すれば、何かそれは

○日野政策総括監

だから、県大はやっぱり 22 歳以上の大人的方も使える大学だということも僕らは言っているので、22 歳までが大学を使うユーザーじゃないので。

○山口知事

本当に佐賀県は 18 歳から 26 歳が極端に少ないんですよ、極端に。そこの機能が急に動き出すの。

○日野政策総括監

だから、学びというのは 40 歳でも 50 歳でもいいんだというマインドが出てくればすごく変わると思うんですよ。

○甲斐教育長

子どもの中で課題解決がはやってくると、子どもの進学にもすごい良い影響が出るという気がします。今はまだ PBL という部分があんまりぴんと皆さんきていらっしゃらない方が多いし、高校で PBL 、課題解決型の探究のほうに力を入れます、コースつくりましたと言うと、何それって言われてしまうところがあるので、理解が進むまでやってほしいなと思っています。

○溝上委員

佐賀で働く人増えると思いますよ、こういうのをやったら。採用の会社も僕やっているんですけれども、説明会でも行かないんですよね、今、学生の子たちは。昔、合同企業説明会って多分結構皆さん行かれた人も多いと思うんですけど、あれは全然行かなくなってしまっていまして、大体今、オンラインとか自分で情報収集して、狙い打ちで行くようになってるんですね。何でかというと、合同企業説明会で説明する話はあんまり 本音じゃないと。建前みたいな話で、やっぱり本音が知りたい。本音でやるという意味では、やっぱり一緒にプロジェクトをやってみるとか、自然な出会い方みたいなのができたら佐賀で働く人は絶対増えると思います。学生さんたちもそういう行動様式に変わっていますよね。就活の意見は。

○山口知事 良い感じだね、これね。

○溝上委員

いい感じです。これから流れも絶対いいと思います。

○前田政策部長

県立大学に限らず、これから、大学は地域との連携を深めていくことになると思うんですね。そこに高校生であれ、大人であれ、関わっていくということは大きなプロセスかなと思います。高校生の視野もかなり広がると思うんですね。それで、地域の課題に向き合うということで、佐賀県に対する愛着とか、佐賀県はこうなんだというところに関心を持つことで、またその先の就職というところにつながっていくという連鎖、好循環がぜひ生まれていければという気はします。

○山口知事

なるほど。県庁インターンで、どこでインターンをやったかによって県庁に入りたいか入りたくないか割れちゃうんです。さがデザインとか来るとみんな入りたがるとかさ。

教職になりたい人はどこでインターンするの。

○甲斐教育長

教育実習がありますし、その前に体験プログラムもあります。

○山口知事

だから、やっぱりインターンというか、その前が大事だよね、今の溝上さんの話だと。

○溝上委員

一般企業はインターンシップを力込めてデザインしていますから。やっぱりそこでいかにその仕事の魅力を伝えるかとか、そこでプロモーションと言ったら語弊があるのでちょっとあれかもしれませんけど、とにかく力を入れて、自分たちの仕事のやりがいを伝えようということに全集中していますので。うちで採用担当5人いるんですよね。5人のメンバーがとにかくインターンシップと、入った後のフォローミーみたいなことをやって、とにかく入ってもらう。その中で伝え方はやっぱり相当力を入れてみんな一般企業はやっていますので。

○飯盛（いさかり）委員

教育実習もコーディネーターみたいな人が1人やったほうがいいと思うんですよね。それぞれ自分の仕事しながら、じゃ、ここのこの先生がつくから、こっちとしてはお荷物みたいな感じで大変だったんですね。

○山口知事

教職も狭き門やったですね。昔は。

○日野政策総括監

そういうところが学生から見てすぐ分かるような時代になってきてるので、だから、今、県内企業はどこも採用でそういう苦労をされていると思うんですけども、民間企業はやっぱり学生目線の声が商品開発にも結びつくし、会社のありようにも結びつくので、だから、そういう意味で、例えば、企業側からのお題を、そういうお題を出してもらって、じゃ、県大の2年生ぐらいの考え方はどうなるんだろうというのを提案しても全然面白いのかなとも思いますよね。

○溝上委員

本当に教員もそうです。学生目線で出るというのは面白いのが出てきますよ。

○日野政策総括監

3年生になると、今度は自分が就職活動するから、純粋な気持ちの中にそれができなくなる感じもするので、1、2年生ぐらいだとお題がシンプルで分かりやすいのかなというのもあったりしますね。

○山口知事

今日はとてもいい論点整理ができた。

○荒木委員

今、高校生、もっともっと可能性もあるけど、何せ忙しい。大学の受験がやっぱりペーパーだから、受験勉強のほうが大切とかいうふうな子もまだいっぱいいるから、受験のアドミッションポリシーとかに今後の経験を問うとか、さっきの単位を取得するとかすれば、もっとたくさんの高校生がやろうかなと、経験に目を向けてくれるのが、いろんな仕組みづくりがいいなと思いました。やっぱり私もいろいろやろうといって高校に働きかけるんですけど、実際、高校の先生と協力しても、生徒を集めるのがすごく大変で、来た子はすごく楽しかったと言うんですけど、もうちょっと来てよといつも思うから、来るような制度づくりを入試だったりとかも含めてもっとやれたらなと思いました。

○飯盛（いさかり）委員

ちょっとテーマから外れて申し訳ないんですが、県立大学にちょっと言ってみたいと思うのは、公立高校の定員割れの学校にも共通する話題として、トイレをきれいにというのがあります。うちの清和は建て替えるときに、昨日初めて女子のほうに付き添ってもらって行

ったんですよ。やっぱり聞いたら、建てるときに、パウダールームのイメージと言われて、入ったところ、ちょっと陰になったところに姿見があるし、歯磨きとかするようなところもあるし、あとは全部洋式のトイレで、お金はかかるだろうけれども、それで、あそこの総合庁舎がそういったあれができるかどうかというのは難しいかもしれませんけれども、そういう発想も、なるほどと思って、中学生が体験入学で来ますけれども、やっぱりアンケートにたくさん書いている。トイレがきれいだからと書いてあるんです。

○山口知事

今度、県大は、総合庁舎じゃない新設するほうはさすがに全部あれやろう、パウダールームやろう。

○日野政策総括監

学生の快適さと、あとは、学生が暇な時間にお互いにPBLを中心になりますから、お互いにグループワークできるようなというのがこれからの中大の必須アイテムになる。

○山口知事

ちょっと高校も少し考え方かなと今、予算の中で。

○山口知事

私学の無償化の影響もかなり出てくると思っていて、だから、やっぱり今、公立はきついですよ、全国的に、議論していますけれども。

○佐保政策企画監

今日は非常にいい議論をしていただいたと思います。

以上をもちまして第33回の佐賀県総合教育会議を終了したいと思います。どうも皆さんお疲れさまでした。